

# 社会福祉士養成教育におけるディベート実践の有用性

## ——相談援助演習の取り組みから

池 本 薫 規

### 〔抄 録〕

本稿は、相談援助演習で行うディベートが、社会福祉士に求められる価値・倫理、専門的知識・技術などを総合的に習得できる教育実践であり、社会福祉士養成教育において有用性の高い実践であることを明らかにすることを目的としている。

まず、ディベートの概要、国家資格の社会福祉専門職である社会福祉士の役割、社会福祉士養成課程における教育カリキュラム、ディベート実践の場である相談援助演習のねらいと教育内容について整理する。続いて、ディベート実践によって習得できる社会福祉士に求められる10項目のスキルを提起したうえで、授業アンケートを手がかりにしてディベート実践の教育的効果、有用性について考察した。

その結果、10項目の各スキルの習得度にばらつきが見られるものの、ディベートが社会福祉士養成教育において有用性の高い実践であり、そのなかでも特に社会福祉士の「価値・倫理」に対する理解を深められることが示唆された。

キーワード：相談援助演習 ディベート 社会福祉士 教育的効果

### 1. はじめに～本稿の目的

本稿の目的は、相談援助演習で行うディベートが、社会福祉士に求められる価値・倫理、専門的知識、専門的技術などを総合的に習得できる教育実践であり、社会福祉士養成教育において有用性の高い実践であることを明らかにすることである。これまでディベートの教育的効果に関する研究は多く行われてきたが、社会福祉士をはじめ社会福祉専門職の養成教育と関連づけてその有用性を明らかにしようとした研究はほとんどない。

本稿は、2節でディベートについて概観し、国家資格の社会福祉専門職である社会福祉士の役割、社会福祉士養成課程における教育カリキュラム、ディベート実践の場である相談援助演習のねらいと教育内容について整理する。続いて、3節ではディベートによる教育的効果に関する先行研究を整理し、ディベート実践によって習得できる社会福祉士に求められる10項目のスキルを提起したうえで、授業アンケートを手がかりにしてディベート実践の教育的効果、有用性について考察する。最後に本稿の要点と課題をまとめる。

なお、ディベートの基本的なルールや手順といった概要、ディベート実践の場である相談援助演習の内容、相談援助演習におけるディベート実践の方法や授業展開などについては、すで

に池本（2015）によってまとめられており、本稿はその研究を継続発展させたものである。

## 2. 相談援助演習におけるディベート実践の位置づけ

### (1) ディベートの概要

ディベートは、ある論題（テーマ）について、「肯定側（賛成側）」と「否定側（反対側）」の異なる立場に分かれて、それぞれの立場から意見を主張し、討論を行う。「審判団」は、肯定側と否定側のどちらの主張が論理的で説得力があったのかを判定し、勝敗を決めるものである。

ディベートでは、討論を行う者は論題に対する自分の意見や考え、価値観などに関係なく、肯定側と否定側のどちらかのグループに割り振られる。また、討論の順番や方法、時間設定などの細かなルールが決められており、それに基づいて討論が進められる点が特徴となっている。一般的に論理的思考力やコミュニケーション力などを高める教育的効果があるものとして、学校教育や企業研修などで取り入れられ、その効果に関する実践報告や研究は数多くある。

相談援助演習でディベートを行うにあたっては、まずディベートに関する講義を通して理解を深めたあと、受講者をくじ引きで3チームに分ける。各チームが一度は「肯定側」・「否定側」・「審判団」を担当できるよう3試合制に設定し、従って1チームが2つの論題に取り組むことになる。各チームは他の2チームに討論してもらう論題を決める。例えば、Aチームで決めた論題をB・Cチームが討論することになる。

各チームで取り組む論題が決まると、討論本番までにメンバー同士で協力しながら情報収集・調査、論点整理、レジュメ・資料準備、相手側の主張を予測した質問内容の検討、相手側からの質問内容を予測した返答内容の検討、討論の戦略を練る作戦会議などを行う。この事前準備の充実度がディベートの勝敗を左右することが多い。

相談援助演習では、次の①～⑧の流れと時間配分（計60分間）でディベートを進める。

- ① 肯定側の主張（10分）
- ② 否定側の作戦会議（3分）：主張に対する質疑内容を整理する
- ③ 否定側から肯定側へ質疑及び応答（5分）
- ④ 否定側の主張（10分）
- ⑤ 肯定側作戦会議（3分）
- ⑥ 肯定側から否定側へ質疑及び応答（5分）
- ⑦ 討論を行う（20分）
- ⑧ 審判団の判定（4分）：審判一人ひとりが判定結果と理由を述べる

ディベートは審判団の判定により勝敗が決まり終了する。審判員は一人ひとりが事前に配布された「ディベート採点表」（①時間配分、②チームワーク、③発表態度、④討論内容の水準）

を活用して、どちらの主張が論理的で説得力があるかを基準にして勝敗を決める。最終的に審判員による「勝ち」の判定数の多いチームが勝利となる。

## （2）相談援助演習のねらいと教育内容

社会福祉士は、「社会福祉士及び介護福祉士法」に定められた国家資格であり、「専門的知識及び技術をもつて、身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者（第47条において「福祉サービス関係者等」という。）との連絡及び調整その他の援助を行うこと（第7条及び第47条の2において「相談援助」という。）を業とする」専門職である（同法第2条）。

社会福祉士の養成課程における教育カリキュラムは、①「人・社会・生活と福祉の理解に関する知識と方法」、②「総合的かつ包括的な相談援助の理念と方法に関する知識と技術」、③「地域福祉の基盤整備と開発に関する知識と技術」、④「サービスに関する知識」、⑤「実習・演習」の五つの科目群で構成されている（厚生労働省 2008 a:5）。本稿で取り上げる「相談援助演習」は、「相談援助実習指導」、「相談援助実習」とともに⑤「実習・演習」の科目として配置され、「実践力の高い社会福祉士を養成するという観点に立って、（中略）社会福祉士として必要とされる知識及び技術を統合し、これらを実践的に修得するための科目」として位置づけられている（厚生労働省 2008 b:7）。これらのカリキュラムのもとで、専門的知識や技術のほか、「価値・倫理」を含めた社会福祉士の専門性を修得していく<sup>1)</sup>。特に「価値・倫理」は社会福祉士の専門性における極めて重要な要素である。

相談援助演習について、文部科学省・厚生労働省（2008:6,9）は「相談援助演習の実施に当たっては、相談援助実習指導及び相談援助実習の教育内容及び授業の進捗状況を十分踏まえること」とし、相談援助演習の教育内容・ねらいを次のように定めている。

〈相談援助演習の教育内容・ねらい〉

相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。

- ① 総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。
- ② 個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うこと。

さらに、社団法人日本社会福祉士養成校協会演習教育委員会（2015:3）は、相談援助演習の目的と意義について次の3点を挙げている。

① 総合的・包括的な理解

「テーマや課題に焦点をあてた総合的な学習を通して、科目別に学習する事柄の関連性について気づき、総合的・包括的に理解できるようにする」

② 専門的な実践力の習得

「具体的な課題や状況について観る・聴く・話す・書く・体験する・考える・感じる・振り返るといった能動的な活動を組み合わせることによって、自分や社会への気づきを得て理解を深め、それらを実践に応用するスキルを身につけることを目指す」

③ 相談援助実習・実習指導との相乗作用による教育効果

「演習も、実習前であること、あるいは実習後であるということが、取り上げる内容についての現実感を増し、学習意欲を高めることになる。つまり、実習と演習は、双方の教育効果を相乗的に高めることができる」

このように「相談援助演習」は、「相談援助実習」・「相談援助実習指導」と関連しながら、社会福祉士に求められる価値・倫理、専門的知識、専門的技術など社会福祉士の専門性をより実践的に修得することを目標とした科目であるといえる。本稿では、その目標を達成するための一つの方法としてディベート実践を位置づけている。

### 3. ディベート実践による教育的効果

#### (1) ディベートによる教育的効果に関する先行研究

ディベートを活用した教育実践に関する研究はこれまでも多く行われており、それらを概観してみると、看護学・看護師養成に関すること、教育学・教員養成に関すること、アクティブ・ラーニングの意義・実践に関すること、コミュニケーション力やプレゼンテーション力など特定のスキルの習得に関すること、初年次教育・基礎教育に関すること、その他実践報告などに概ね類型化することができる。社会福祉士をはじめ社会福祉専門職の養成教育と関連づけた先行研究はほとんどないが、いくつかを整理しておきたい。

吉田（2002）は、ディベートの教育効果として「問題発見能力」、「資料、データの収集力、及び分析力」、「論理的な思考力」、「問題解決力」、「意思決定力」、「コミュニケーション能力」を養うことができるとした。そのうえで、福祉教育においては、クライアントとのコミュニケーションのトレーニング、チームワークが重要な社会福祉職の職業訓練、福祉に関する社会問題を発見し問題解決の方法を考え意思決定していくこと、情報収集力をスキルアップすることにより施策の変更や法律改正などへ対応できる力を養うこと、などにディベートが有効であるという考えを示した。福祉教育や社会福祉専門職養成におけるディベートの教育的効果を整理している点で、数少ない研究の一つである。

石井ら（2005）は、介護福祉士には専門職として「ケアの根拠を明確にし介護展開をしてい

く力が求められる」なかで、「ディベート討論を通して、学生の持っている問題解決能力を最大限に引き出すことが、介護福祉士としての基礎力向上に繋がるのではないか」として、介護福祉士教育におけるディベートが学生に及ぼす効果について分析を行っている。その考察・まとめでは、ディベートによって「物事の見方や人に分かりやすく伝える方法、グループ内で役割分担などを学生自身が考えること」ができた点、学生が「情報を整理する力や分析力の必要性を感じて」おり、「その力をつける方法を学生に提供していくことができれば意義のあるものになる」こと、教員側の課題として「学生がディベート法を活用しやすいように、実習の中で適切に手法の活用場面を提示していくこと」や「方法論として学んだディベートの応用の仕方を説明していくこと」などを挙げている。

鴨井（2004）は、社会福祉関連の科目の授業において実践したディベート学習の内容とともに、成果と課題について報告している<sup>2)</sup>。成果や課題として、「他人の意見を聞き、自分の意見を述べることを通して認識が高まっていく」ことや「回数を重ねることで、要領を覚え、より自由に効率よくディベートを進めることができたこと」、事前準備の重要性、学生の自主性と主体性に任せていくことの必要性などを挙げている。専門職養成に関連づけた分析、考察ではないが、様々な社会問題とくに社会福祉に関連する問題に引きつけたテーマを取り上げて、時間をかけながら丁寧な授業が展開されており、ディベートを終えた学生の感想からは専門職としての基本的な視点や姿勢に関する学びがあったことがうかがえる。

先行研究については、より丁寧な分析、評価が必要であり、今後の課題としたい。

## （2）ディベート実践によって習得できるスキル

相談援助演習において、先述のディベートを行うことにどのような意義があるのか。それは、社会福祉士に求められる10項目のスキル（能力、技能）を総合的に習得できる点にあると考えている。相談援助演習におけるディベート実践を通して習得できると想定される10項目のスキルとは、以下の通りである。これらは、鈴木（2006）が示す一般的にディベートで求められる力を参考に整理したうえで、社会福祉士に求められる基礎的かつ総合的なスキルに関する項目・内容を独自に加えたものである。

〈ディベート実践によって習得できる社会福祉士のスキル〉

### ① 自分の考え方に気づき、把握する力（自分の価値観を見つめる力）

社会福祉士は、相談援助を行うにあたって、自分が持っている価値観を知り、自分の心の動きをコントロールしていくことが求められる。これは、普段あまり意識していない漠然とした自分の意見や考え方、価値観に気づくことができる力であり、自己理解・自己覚知につながる。ただし、ディベートでは個人的価値観に関係なく、割り振られた立場（肯定側・否定側）で討論しなければならない。

② 相手の考えを理解する力（他者の価値観を理解する力）

相手の意見や考えなどについて傾聴、受容、共感、理解する力である。自分と相手の価値観の違いを理解し、相手を尊重することは、他者理解・相互理解の拡大につながる。ただし、ディベートにおいては相手チームに同調する発言は避けなければならない。

③ 対立意見を評価・判断する力

ディベートでは自分の意見や考えなどに関係なく肯定側と否定側のどちらかに割り振られるため、例えば論題に肯定的な意見や考えなどを持っているとしても、否定側の立場から主張しなければならないことがある。そのようなとき、ディベートを行っているあいだは自分の意見や考えなどと対立する立場を理解せざるを得ない。このことは「①自分の考え方に気づき、把握する力（自分の価値観を見つめる力）」、「②相手の考えを理解する力（他者の価値観を理解する力）」の習得へつながる機会にもなる。

④ 論理的思考力

社会福祉士の相談援助の場面で例えるならば、利用者が抱える生活問題について、その原因を探り出し、改善・解決に向けた方策を考えるとといった一連の支援過程を捉えることができる力である。また、ディベートでは情緒的・心情的ではなく、より論理的に主張していくことが求められる。

⑤ 自分の立場・意見を客観的に相手に伝える力

討論にあたっては、過度に感情的・主観的な主張は避け、冷静さと客観性を持つておく必要がある。このことは、相談援助において社会福祉士に求められる基本的姿勢でもある。「④論理的思考力」・「⑥プレゼンテーション力」にも関連することであるが、ディベートでは主張の論理性・客観性、説得力（プレゼンテーション力）が大きく問われる（仮説、推論、先入観は排除しなければならない）。

⑥ プレゼンテーション力

自分の意見や考えなどを相手にわかりやすく、理解してもらえるように伝える力である。相手の理解力にあわせて伝える工夫が求められる（声の抑揚、話すスピード、ジェスチャー、ポスター・パネルの活用など）。利用者との関わりや関係者とのカンファレンス等で必要となる力である。

⑦ 質問力

主旨が明確で相手が理解しやすい質問は、相手の意見や考えなどをより多くの確に引き出すことができる。質問する力は、社会福祉士の相談援助の場面で、例えば利用者から多くの情報を聞き取るアセスメント作業などにおいて特に重要となる。

⑧ 調査（データ・資料収集）力

ディベートの勝敗はチームの持つ情報量、知識量、理解力に大きく左右される。そのため、データや資料を収集する調査力、協調性・チームワークが重要となる。また、討論における

「立証」・「反証」に「統計資料」・「権威のある文献」などを活用することで、主張の説得力が増す。社会福祉士には、相談援助に必要な利用者に関する情報や、専門的知識や技術に関する情報を収集していく力が求められる。このことが利用者への支援の幅を広げることにもつながる。

⑨ 資料作成力

自分の意見や考えなどをわかりやすく相手に伝えていくために、膨大な情報の中から必要なものを収集整理し、図表などを駆使しながら資料にまとめていく力である。福祉現場での職員会議やカンファレンス、事例検討会などにおいて、様々な情報を整理、資料化し、他者と情報共有していくうえで必要となる力である。

⑩ 協調性・チームワーク力（意思統一、コミュニケーション、役割分担など）

ディベートはチームで取り組むことから、準備段階から討論本番まで常にメンバーの協調性、チームワーク力が問われることになる。チームの状況によっては強力なリーダーシップが必要となる場合もある。論題に対するチームの立場や主張をメンバー間で意思統一し、メンバー間での積極的なコミュニケーションによりチームの凝集性を高めるとともに、特定のメンバーに負担が集中しないよう役割分担をしながら準備を進め、討論本番に臨む必要がある。いうまでもなく、福祉実践・福祉労働においてはチームアプローチ、チーム労働が重要となる。

（3）ディベート実践による10項目のスキルの習得状況～授業アンケートから

ディベート実践を通じて先述の10項目のスキルがどの程度、習得（「成長」と言い換えることもできる）できたかを明らかにするために、ディベートの全日程が修了した後に相談援助演習の受講生に授業アンケートを実施した。実施にあたっては、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針を参考に倫理的配慮を行うとともに、対象者（受講生）に対しては、回答内容が成績評価に決して影響しないこと、回答拒否の自由があること、結果分析において個人が特定されないよう処理することを口頭で説明した。

アンケートの対象者は、2010年度～2016年度に「相談援助演習」ゼミ（4回生以上で構成）においてディベートを行った受講生88名である。受講生による自己評価だけでなく、授業評価や学習の到達度を担当教員として把握するために記名方式とした。授業時間内に書面を配布・回収した。

アンケートの内容は、「選択肢形式（10問）」と「自由記述形式（1問）」を併用した。「選択肢形式（10問）」は、10項目のスキルそれぞれの習得度をたずねたものである。ディベートを行う前のスキルを「0」（ゼロ）として、ディベート終了時点で受講生自身が習得できたと思う度合いを5段階評価（0、1、2、3、4）で自己採点する。つまり、ディベート前後で全く習得（成長）できなかったと考えた場合は「0」、最も習得できたと考えた場合は「4」となる（なお、ディベートによってスキルが後退することはないと考えて、マイナス評価は設定して

いない)。「自由記述形式 (1 問)」では、ディベート実践を通して感じ、気づき、考えたことを自由に記述してもらった。

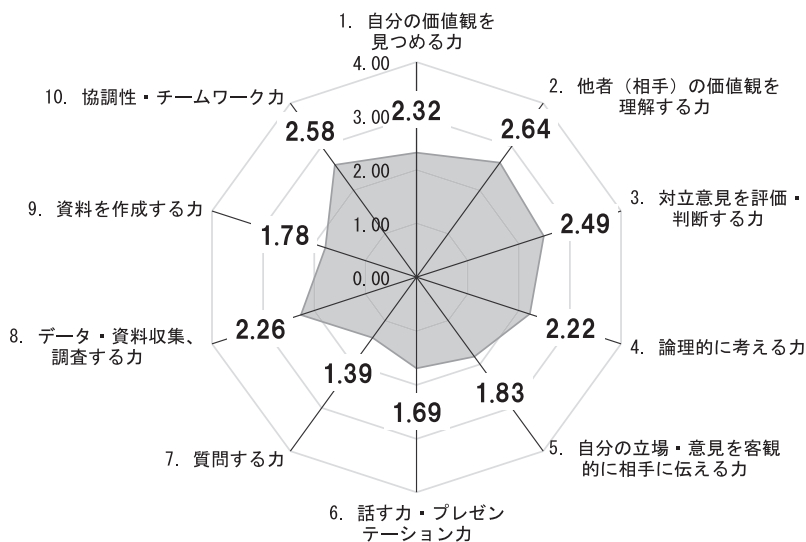
まず「選択肢形式 (10 問)」の結果であるが、図表 1「10 項目のスキルにおける習得度合い」は、受講生 88 名の自己評価による採点の平均値を示している。平均値すなわち習得度合いが最も高かったスキルは「2. 他者 (相手) の価値観を理解する力」(2.64 点/4 点満点中)であり、以下「10. 協調性・チームワーク力」(2.58 点)、「3. 他者 (相手) の対立意見を評価・判断する力」(2.49 点)、「1. 自分の価値観を見つめる力」(2.32 点) の順で続く。これらのスキルは、社会福祉士の専門性における重要な要素である「価値・倫理」と密接に関わるものであり、受講生はディベート実践を通じて「価値・倫理」に対する理解を最も深めることができたと考えられる。

一方、最も平均値 (習得度合い) が低かったスキルは「7. 質問する力」(1.39 点)であり、以下「6. 話す力・プレゼンテーション力」(1.69 点)、「9. 資料を作成する力」(1.78 点)、「5. 自分の立場・意見を客観的に相手に伝える力」(1.83 点) の順となった。平均値 1 点台のスキルを見てみると、受講生が他者へ直接的に働きかけるスキルへの自己評価が低い傾向があり、他のスキルと比較してディベート実践による教育的効果があまり得られていないことがうかがえる。

これらの平均値の具体的内容を見てみる。図表 2 は各スキルに占める習得度 (0、1、2、3、4) ごとの「割合」、図表 3 は同じくその「人数」を示したものである。

特徴的なものを抜粋すると、習得度「0」すなわちディベート実践を通じて全く習得 (成長) できなかったと答えた割合の最も高いスキルは「7. 質問する力」(15.9%、14 名)であり、習

(図表 1) 10 項目のスキルにおける習得度合い (平均値)



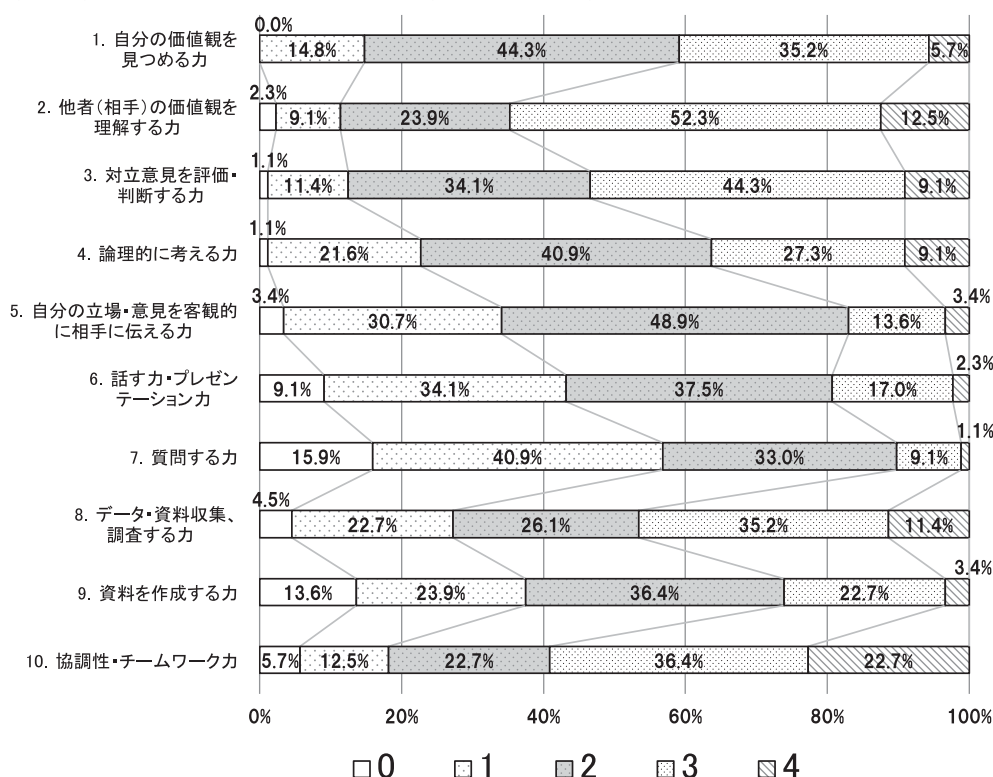


得度「1」を加えると唯一、半数を超えた（56.8%、50名）。

一方、習得度「4」の割合が最も高いスキルは「10. 協調性・チームワーク力」（22.7%、20名）、次に「2. 他者（相手）の価値観を理解する力」（12.5%、11名）となった。習得度「3」を加えると、「2. 他者（相手）の価値観を理解する力」（64.8%、57名）、「10. 協調性・チームワーク力」（59.1%、52名）の順となり、それぞれ約6割を占めた。

このように、スキルによって習得度の内容が大きく異なりばらつきがあることがわかる。

（図表2）10項目のスキルにおける習得度（0、1、2、3、4）ごとの割合



（図表3）10項目のスキルにおける習得度（0、1、2、3、4）ごとの人数

		10項目のスキル									
		1. 自分の価値観を見つめる力	2. 他者（相手）の価値観を理解する力	3. 対立意見を評価・判断する力	4. 論理的に考える力	5. 自分の立場・意見を客観的に相手に伝える力	6. 話す力・プレゼンテーション力	7. 質問する力	8. データ・資料収集、調査する力	9. 資料を作成する力	10. 協調性・チームワーク力
習得度	0	0	2	1	1	3	8	14	4	12	5
	1	13	8	10	19	27	30	36	20	21	11
	2	39	21	30	36	43	33	29	23	32	20
	3	31	46	39	24	12	15	8	31	20	32
	4	5	11	8	8	3	2	1	10	3	20

（単位：名）

次に、「自由記述形式（1問）」に記述された内容について、それらを10項目のスキルごとに分類、整理したうえで、主なものを抜粋して報告する。「選択肢形式（10問）」で表れた数値結果だけでは把握しきれない受講生の認識や理解した内容を補完する意味もある。なお、記述内容のうち明らかな誤字脱字は修正し、文体は常体で統一した。

〈1. 自分の価値観を見つめる力〉

- ・いろいろな視点から考えることの大切さを学んだ。他の視点から考えることで、今まで自分の中でなかったような考え方が出てきて、自分自身の新たな発見にもなった。
- ・自分の価値観について見直すことができた。自分の価値観は、自分でわかっているようでわかっていない。討論をして、自分の意見が揺らぐこともあった。
- ・今回のディベートを行うにあたって意識したことは、「なぜ？」という疑問である。それも相手にではなく自分自身の考えに対してである。自分が分かっていないことを相手に問いただされても、絶対に答えられないからである。その中で、自分の本来の考えは何なのか、しっかりと向き合っていくことの大切さもわかった。

〈2. 他者（相手）の価値観を理解する力〉

- ・自分とは違った価値観を理解するというのは、とても難しいことだと思った。ただ、自分とは違う立場に立つことによって、「そうだったのか」と気づくこともあるし、価値観が少し変化することもあるのだとわかった。最初から自分とは違うからと否定してしまうのではなく、向き合うことも大切だとわかった。
- ・自分の思っている立場と違う立場で議論するのはとても難しいことだったが、他者を理解するためには必要な視点であると感じた。
- ・日常生活で、他者と意見がくい違うことは多々あると思う。そのときに頭ごなしに反対と言うのではなく、その意見の利点を考えたうえで、賛成・反対や意見が言えるように日々意識できたら良いと思った。

〈3. 対立意見を評価・判断する力〉

- ・賛成側（否定側）の立場にいるのに、自分の価値観は逆という矛盾の中でやるというのは困惑もあったけど、新たな発見、考えがわかり新鮮だったと思う。
- ・自分の価値観と違う立場で意見を言うことで、客観的に物事を捉えられて、自分がこれまで正しいと思っていた価値観を見つめ直せるきっかけとなった。
- ・自分の考えと違う意見を主張していくことは難しいと感じた。自分の価値観は持ちながら、客観的に物事を見て、考え、主張することが、以前よりもできるようになったと感じた。

〈4. 論理的に考える力〉

- ・論理的に話すことの大切さと難しさを知った。
- ・自分たちは何を軸に主張をするのか、論点をしっかりと置くことの大切さを学ぶことができた。

た。

- ・自分の価値観とは別に、客観的に問題を捉え主張することで、論理的に考える力が少しだけに身に付いたかなと感じる。

#### 〈5. 自分の立場・意見を客観的に相手に伝える力〉

- ・自分が負けず嫌いであることを改めて知った。感情的に考えてしまうこともあったので、冷静に物事を判断できるよう成長したいと強く感じた。

- ・ディベートをするとどうしても感情的になってしまうので、そうならないよう冷静な判断、気持ちで臨まないといけないと思った。

#### 〈6. 話す力・プレゼンテーション力〉

- ・自分が伝えたいこと、思っていることを相手に適確に伝えることができず、自分の語彙力、説得力のなさを実感した。

- ・自分自身で理解したつもりでいても、相手にわかりやすく伝えることは難しいと感じた。わかっていてということと、相手に伝えられるということは違うことだと感じた。

- ・説得力のある話し方の大切さを知った（声の大きさ、身振り、手振りなど）。

- ・相手にわかりやすく伝えることの難しさや、自分の動揺や緊張はすぐに相手に伝わることを実感した。

#### 〈7. 質問する力〉

- ・もっと質問や自分の意見を大勢の人の前で言えるようにしたいと思った。

- ・相手からの質問への受け答えが難しかったし、質問する側も難しいと思った。

- ・疑問に思ったことを積極的に聞くことで、討論の他に自分自身に知識も身に付くと感じた。

#### 〈8. データ・資料収集、調査する力〉

- ・調べ方が甘く、何度も根拠を問われたので焦った。

- ・自分の感情だけに基づく意見ではなく、データや資料に基づいた正しい意見を言うことはとても難しかった。それは、データ、資料を集めたり、そこから自分の意見と混ぜ合わせるという作業が難しいからであると感じた。これらの経験から、自分が意見を述べる時には、正確なデータや資料を確認してから言う必要があると深く感じた。

- ・まずは自分の論点を確立するために資料を集め、理解し、そこからさらに相手が質問するであろうことを予測し、それに対する答えを考えるのが難しかった。

- ・インターネットでは、莫大な情報が溢れすぎていて、どれが正しい意見なのか、適した資料はあるのかの判断もまた難しかった。

- ・自分の意見を言うことができるためには、その意見に自信があったり、根拠があること等も関わってくるように感じたので、知識をつけることも大切だと思った。

- ・準備の大切さを改めて学ぶことができた。準備というのは、やはり自分の自信になるし、相手にも伝わると感じた。

・何事においてもであるが、自分が納得するまで調べ、考えていきたいと思う。

〈9. 資料を作成する力〉

・発表を工夫することで、言葉だけでなく資料を用いて視覚から理解し、より説得力が深まることがわかった。

・自分たちの伝えたいことや何を参考にしたか、図やグラフなど相手に伝える手段の工夫が大切だと感じた。

〈10. 協調性・チームワーク力〉

・お互い価値観や意見の違う人と一緒にチームになる難しさがあった。それは仕事をし始めても感じるのだと思うし、協調性が必要だと思う。

・チームワーク（他者を気にかけること）が最も重要だと感じた。自分が調べるところだけしでいいのではなく、チームの仲間が発言することに対しても耳を傾け、一緒に考える力、協調性が身に付いたと思う。

・どのような主張でいくかや、役割分担等、グループで協力して決めることがたくさんあったので、改めてチームワークの大切さを学ぶことができた。

#### 4. おわりに～社会福祉士養成教育におけるディベート実践の有用性

本稿では、相談援助演習におけるディベート実践が、社会福祉士に求められるスキル（10項目）を習得するうえで有用であると考え、その分析、検討を行った。

その結果、図表1にあるように、10項目の各スキルの習得度合い（平均値）にばらつきが見られるものの、グラフの網掛部分はディベート実践によって習得できたスキルの総体を示しており、自由記述の内容と照らし合わせてみても、ディベートが社会福祉士養成教育において有用性の高い実践であるということが出来る。そのなかでも、平均値上位のスキルである「2. 他者（相手）の価値観を理解する力」、「10. 協調性・チームワーク力」、「3. 他者（相手）の対立意見を評価・判断する力」、「1. 自分の価値観を見つめる力」などは、社会福祉士の「価値・倫理」と密接に関わるものであり、ディベート実践を通して特に社会福祉士の「価値・倫理」に対する理解を深められることが示唆された。

一方で、平均値が1点台であった「7. 質問する力」、「6. 話す力・プレゼンテーション力」、「9. 資料を作成する力」、「5. 自分の立場・意見を客観的に相手に伝える力」など、他者へ直接的に働きかけるスキルへの自己評価が低い傾向が明らかとなり、他のスキルと比較してディベート実践による教育的効果があり得られていないことがわかった。この点については、受講生の習得する能力が低い、あるいはすでに持っているスキルが低いと言い切れるものではなく、あくまでも授業アンケートが自己評価であることや、教員の授業運営や指導方法によって習得度が変化する可能性があることに留意が必要である。先行研究のさらなる分析、評価方法の再検討、授業運営や指導のいっそうの工夫が今後の課題である。

## 注

- 1) 社会福祉士に求められる価値・倫理に関しては、専門職団体である公益社団法人日本社会福祉士会が定めた「公益社団法人日本社会福祉士会の倫理綱領（「社会福祉士の倫理綱領」，「社会福祉士の行動規範」）」（[https://www.jacsw.or.jp/01\\_csw/05\\_rinrikoryo/files/rinri\\_kodo.pdf](https://www.jacsw.or.jp/01_csw/05_rinrikoryo/files/rinri_kodo.pdf), 2005.6.3）が詳しい。社会福祉士の実践はこれを拠り所としている。
- 2) 鴨居（2004）は、幼稚園教諭免許取得を主な資格取得とするコースにおける「社会福祉概論」の授業で実践したディベート学習について報告している。

## 文献

- 池本薫規（2015）「相談援助演習におけるディベート実践の方法と展開」『佛教大学福祉教育開発センター紀要』12, 139-150.
- 厚生労働省（2008 a）「社会福祉士養成課程における教育内容の見直しについて」（[http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei01\\_0001.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei01_0001.pdf), 2008. 3. 5）.
- 厚生労働省（2008 b）「社会福祉士養成課程及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しに関するQ&A」（<http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei12.pdf>, 2008. 7）.
- 文部科学省・厚生労働省（2008）「文部科学省高等教育局長，厚生労働省社会・援護局長（通知）『大学等において開講する社会福祉に関する科目の確認に係る指針について』」（<http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei07.pdf>, 2008. 3. 28）.
- 社団法人日本社会福祉士養成校協会演習教育委員会（2015）「相談援助演習のための教育ガイドライン」（[http://jaswe.jp/practicum/enshu\\_guideline2015.pdf](http://jaswe.jp/practicum/enshu_guideline2015.pdf), 2015. 3. 24）.
- 吉田あけみ（2002）「ディベートで学び，考える人間福祉」『広島文教大学大学紀要』37, 79-88.
- 石井紀子・小河由美・小林頼子・伊藤八寿子・中島恵（2005）「介護福祉士教育におけるディベート討論の試み」『聖徳大学研究紀要 短期大学部』38, 13-17.
- 鴨居慶雄（2004）「教育実践記録 ディベート学習の取組みを中心に－社会福祉概論の授業実践のまとめ」『大阪千代田短期大学紀要』（33），175-195.
- 鈴木勉（2006）『ディベート』ナツメ社.

（いけもと しげのり 佛教大学福祉教育開発センター）